

ツネ ログ #21

2026年5月号

皆さん、こんにちは。

カナダ・バンクーバーで開催された国際サッカー連盟(FIFA)総会、アジアサッカー連盟(AFC)総会に出席しました。現地では、多くの関係者との交流を通じて、日本のプレゼンスが高まっていることをあらためて実感しました。

SAMURAI BLUE(日本代表)がKIRIN WORLD CHALLENGE 2026においてイングランド代表に初勝利を収めたことに加え、今年のアFCアジアカップでは、U23男子、女子、そして先日のU20女子と、各カテゴリーで大会の頂点に立っています。「今の日本は勢いがある」「日本はすごい」など多くの方から称賛の言葉をいただきました。プレゼンスの向上という意味においては、勝つことの重要性をあらためて認識しました。

タイで開催されたAFC U20女子アジアカップは決勝で朝鮮民主主義人民共和国と対戦し、1-0で勝利しての優勝でした。苦しい試合ではありましたが、将来を担っていく選手たちの大きな自信になったと思います。WEリーグでプレーする選手が多く、リーグそのもののレベルアップにもつながっていくはずで

総会に話を戻せば、各国・地域の関係者とコミュニケーションをとる中で、さまざまな情報を得ることができました。毎回、大陸連盟ごとにチームを組んでサッカーをするのですが、一緒にボールを蹴ることで距離も一層縮まっていくものです。ちなみに今回のAFCチームは、なかなか調子が良かったです。

JFAのトピックで言えば、南米サッカー連盟(CONMEBOL)、スペインサッカー連盟とパートナーシップ協定を再締結しました。各世代チームの相互招へいや事務局、役員間の交流などを積極的に行っていくこととなります。

会長として2期目に入り、いつもオープンにしている会長室を“模様替え”しました。見晴らしのいい部屋なので、応接室として使用するだけでなく「ここで会議をやってみては」という思いをずっと持っていました。机と椅子を運び込んだらちょっとした“会議室風”になり、実際に会議も行っています。入りやすい環境になったことで顔を出してくれる人も以前より増えているように感じます。職員の皆さんとの距離を縮め、カジュアルな雰囲気の中でより一層コミュニケーションを深めたいと思っています。

FIFAワールドカップ2026がいよいよ6月に開幕します。FIFA総会ではグループステージの初戦で戦うオランダサッカー協会のFrank PAAUW会長から「しっかり対策させてもらうよ」と声を掛けられました。日本代表が世界から警戒されるチームになってきていることは言うまでもありません。最高の景色を目指して、チームは自信を持って大会に臨んでくれると思います。われわれもそれをしっかり後押ししていきます。

会長の活動報告

2026年3月13日～4月16日(抜粋版)

3/14(日)

JFA 第37回全日本O-30女子サッカー大会 (時之栖スポーツセンター裾野グラウンド)



選手たちが楽しみながらプレーし、仲間と声を掛け合う姿が印象的でした。ピッチの外ではお母さんのプレーを子どもたちが笑顔で見守り、その温かな空気が表形式まで会場を包んでいました。

3/26(木)

日本サッカー協会×日本漢字能力検定協会 「SAMURAI BLUE(日本代表)を応援しようキャンペーン!」 表彰式(JFAハウス)



子どもたち一人ひとりの言葉に込められた、SAMURAI BLUEへのまっすぐな応援の気持ちが伝わってきました。自分の思いを大切にしながら挑戦する姿勢は、日本サッカーを支える大きな力になります。

3/17(火)

日本財団・日本サッカー協会連携協定締結に係る 記者発表(blue-ing!)

「サッカーで未来をつくる」という思いのもと、日本財団との連携をさらに深めていきます。子どもたちが夢や希望を持てる機会を広げながら、地域とともにその未来を支える取り組みを全国に展開していきます。



3/27(金)

「SAMURAI BLUE POP-UP」 視察(MIYASHIYA PARK)

街中に広がるSAMURAI BLUEへの期待と熱気を肌で感じました。日常の中で多くの方が日本代表に思いを重ね、ワールドカップに向けた一体感が着実に高まりつつあります。



3/28(土)

AFC女子チャンピオンズリーグ 2025/26 準々決勝 東京ヴェルディ・ベレーザ vs. スタリオン・ラグナ(東京スタジアム)

3/29(日)

JFA定時評議員会・理事会(JFAハウス) 会長就任会見(blue-ing!)

3/18(水)

AFC女子アジアカップオーストラリア2026準決勝 なでしこジャパン vs. 韓国女子代表(オーストラリア/シドニー)

3/21(土)

AFC女子アジアカップオーストラリア2026決勝 なでしこジャパン vs. オーストラリア女子代表 (オーストラリア/シドニー)



苦しい時間が続く試合でしたが、約75,000人の大観衆の中で勝ち切り、アジア王者のタイトルを獲得できたことは大きな価値があります。厳しい環境の中で掴んだタイトルが、チームの自信につながると感じました。

3/31(火)

KIRIN WORLD CHALLENGE 2026 イングランド代表 vs. SAMURAI BLUE(イングランド/ロンドン)



日頃から高いレベルでプレーしている選手たちの試合後の表情からは、この勝利も特別なものではなく、積み重ねの先にある当然の結果として受け止めているような落ち着きと自信がうかがえました。その姿に、次への確かな手応えも見えました。

3/23(月)

Jヴィレッジ取締役会(オンライン)

3/24(火)

「TATSUMAピッチ」銘板披露の会(福岡フットボールセンター)

前福岡県サッカー協会会長である井上辰馬氏の一周忌に合わせ、福岡フットボールセンターのAピッチが「TATSUMAピッチ」と命名され、銘板披露の会が催されました。辰馬さんの志はこれからも子どもたちの歩みの中で受け継がれていくのだと思います。



4/4(土)

東アジアサッカー連盟(EAFF)第81回理事会 第14回定時総会・第82回理事会(韓国/ソウル)

会議での議論に加え、その前後の対話や日頃からの交流が互いの理解と信頼を深めていることを実感しました。そうした積み重ねが、日本のみならず東アジアサッカー全体を支える確かな基盤になっています。



4/10(金)

河合純一スポーツ庁長官と面会(スポーツ庁)

4/15(水)

WEリーグ実行委員会(JFAハウス)

3/25(水)

WEリーグ理事会(JFAハウス)

4/16(木)

9地域代表者会議、JFA理事会(JFAハウス)



理事会トピックス

2026年度第5回理事会が4月16日(木)、JFAハウスおよびWeb会議システムで開催されました。
詳細およびその他の決議・報告事項については、JFA公式Webサイトをご参照ください。

決議事項

各種規則改正

2026年3月の定時評議員会および前回理事会における決議や事務局体制の見直し、人事制度の改定に合わせ、「理事会運営規則」「理事及び監事の職務権限規則」「政策会議組織運営規則」「事務局組織運営規則」を改正しました。

各種委員会 委員選任

女子委員会、法務委員会、競技会委員会、コンプライアンス委員会を除く11の委員会の委員が選任されました。前述の4委員会の委員については次回の理事会に付議されます。

サステナビリティ・リスペクト委員会に部会設置

サステナビリティ・リスペクト委員会に、防災・復興支援部会とリスペクト部会を設置することが決まりました。

報告事項

1種ゲーム環境に関するタスクフォース立ち上げ

1種(18歳以上)のゲーム環境に関する課題を整理し、将来的なピラミッド構造やカレンダーなどについて検討するため「1種ゲーム環境に関するタスクフォース」を立ち上げました。Jリーグ、日本フットボールリーグ、大学連盟、社会人連盟など関係団体が参画し、年内を目途に一定の結論を取りまとめます。

技術委員会アドバイザーボードを設置

各カテゴリ日本代表の活動のモニタリングや主要スタッフの人事、三位一体の強化策(強化、ユース育成、指導者養成)と普及の推進にかかる方向性などを協議する諮問機関として、技術委員会アドバイザーボードを設置することになりました。

中村俊輔氏がSAMURAI BLUEコーチに就任

元日本代表で、昨年まで横浜FCのコーチを務めていた中村俊輔氏がSAMURAI BLUEのコーチに就きました。選手時代に培った技術や国際経験を生かし、森保一監督の下、FIFAワールドカップ2026に向けたチーム強化に携わります。

FIFA主催の女子の全大会で、女性のスタッフ数が規定

第35回FIFAカOUNCIL会議が3月19日(スイス時間)にオンラインで行われ、今後開催される全てのFIFAの女子の大会で、監督またはコーチのうち少なくとも1名、チームの医療スタッフ1名、およびチームベンチにいるオフィシャルのうち2名を女性とすることが規定されました。

宮本恒靖会長が東アジアサッカー連盟の副会長に再選

東アジアサッカー連盟(EAFF)の第14回定時総会が4月4日、韓国のソウルで行われ、2026~2030年任期の理事会メンバーの選挙を実施。会長、副会長3名、理事5名が選出され、同日に行われた理事会で承認されました。会長には中国のSONG Kai氏が就任し、宮本恒靖会長が副会長に再選されました。

Information

2026/27シーズン 新規契約プロフェッショナルレフェリー

JFAは4月1日付で上村篤史氏(主審)、安藤康平氏(副審)とプロフェッショナルレフェリー(PR)契約を締結しました。2026/27シーズンのPRは主審20名、副審9名の合計29名となります。※4/1発表

SAMURAI BLUEを記録したドキュメンタリー映画『ONE CREATURE』、6月5日より全国公開

SAMURAI BLUEの歩みを記録したドキュメンタリー映画『ONE CREATURE 無数の個性、ひとつの生きもの。』が6月5日より全国公開されます。本作は、FIFAワールドカップカタール2022終了後からFIFAワールドカップ2026本大会を迎えるまでのSAMURAI BLUEの活動を記録したドキュメンタリー作品で、森保一監督と選手たちが日々のトレーニングやコミュニケーションを通じて個々を高めていく様子やオリジナルインタビューなどが映像作品としてまとめられています。※4/2発表

「JFAユース審判員海外遠征プロジェクト」を実施

国際的な視野を持った審判員を育成することを目的に、次世代を担うユース審判員(高校生年代)に海外経験の機会を提供する「JFAユース審判員海外遠征プロジェクト2026」を実施します。今回は、スウェーデンのヨーテボリで開催される「Gothia Cup」にユース審判員が参加し、海外での審判経験を通じて、国際的な視野や異文化の中でのコミュニケーション能力を育み、ユース審判員が成長できる機会を提供します。なお、現地には西村雄一JFA審判マネージャーが同行します。※4/6発表

FIFAワールドカップ2026に荒木友輔、三原純審判員が選出

FIFAワールドカップ2026の担当審判員に、日本から荒木友輔主審、三原純副審が選出されました。両名とも初めてのFIFAワールドカップの担当審判員となります。※4/10発表

サーモス株式会社とJFAソーシャルバリューパートナー契約を締結

JFAは4月1日、サーモス株式会社(東京都港区)とJFAソーシャルバリューパートナー契約を締結しました。真空断熱技術や水分補給に関するサーモスの知見と、JFAが蓄積してきたサッカー活動における医学的データを掛け合わせ、暑熱・寒冷環境下での競技環境の改善や選手のパフォーマンス向上につなげることを目的としています。※4/15発表

その他の主なニュース

- ・学校教員向けプログラム「FIFA Football for schools」にJFAが参画(3/14発表)
- ・アディダス「サッカー日本代表2026 アウェイユニフォーム」が完成(3/19発表)
- ・サッカー日本代表「最高の景色2026」オフィシャルアンバサダー「J BLUE」が「景色」が公式テーマソングに決定(3/23発表)
- ・株式会社電通と「サッカー日本代表放送権(2027~2030)」契約を締結(3/24発表)
- ・「日本サッカー 倫理・コンプライアンスに関する共同声明」を発表(3/29発表)
- ・女子ナショナルチームダイレクターに佐々木剛夫氏が就任(3/30発表)
- ・フットサルナショナルチームダイレクターに吉川智貴氏が就任(4/1発表)
- ・なでしこジャパンのニルス・ニールセン監督が退任(4/2発表)
- ・JFAユニクロサッカーキッズ 2026年度は初開催1会場、初会場2カ所を含む、国内22都市で開催(4/3発表)
- ・なでしこジャパンのリア・ブレインニーコーチが退任(4/6発表)
- ・FIFAe World Cup 2026™ 出場を目指すサッカーe日本代表 選手8名が決定(4/7発表)
- ・「育成年代応援プロジェクト JFA アディダス DREAM ROAD」2026年度 短期留学第1弾 クラブ・アメリカ(メキシコ)へ4選手が短期留学(4/8発表)
- ・JFAサッカー文化創造拠点「blue-ing!」株式会社JTBとメジャーパートナーシップ契約締結(4/7発表)
- ・JFAマジカルフィールドInspired by Disneyファミリーサッカーフェスティバル「ファーストタッチ」2026年度は18会場で開催(4/8発表)
- ・SAMURAI BLUEを記録したドキュメンタリー映画『ONE CREATURE』公開記念の「劇場マナームービー」が公開(4/9発表)
- ・ビーチサッカー日本代表 AFCビーチサッカーアジアカップタイ2026に向けJFAクラウドファンディングで強化のための支援プロジェクトをスタート(4/9発表)
- ・日本サッカー協会、日本ラグビーフットボール協会が「落雷事故ゼロ」を目指す連携施策を始動~落雷から身を守るための「雷気象情報アプリ」をフランクリン・ジャパンと共同開発 ※4/10発表
- ・blue-ing! ゴールデンウィーク特別企画「夢の教室inブルーイング」を開催(4/16発表)

日本オリンピック委員会専務理事

太田雄貴さんを

マンマーク!

第21回はフェンシングのオリンピック銀メダリストで現在、日本オリンピック委員会(JOC)の専務理事を務める太田雄貴さん。

大学の先輩後輩の間柄であり、宮本会長がJOCの本部ビル「JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE」を初めて訪れ、さまざまなテーマについて語り合いました。



動画も公開中!

子どもたちの明るい未来のために JOCとJFAが一緒にやっけていけること

宮本 ミラノ・コルティナ2026冬季オリンピックで日本は過去最多となる24個のメダルを獲得しました(金5、銀7、銅12)。素晴らしい活躍でしたね。

太田 選手たちが頼もしいですね。僕らの時代と違って、外国のトップ選手に対してもまったく気後れしていないですから。

宮本 Z世代、α(アルファ)世代の選手たちにはメンタルの違いというものもあるんじゃないか。

太田 インターネットネイティブであり、デイワン(day one)、つまりスタートラインから世界のトップ選手の映像を見ることができている環境にあります。僕らのころは中学、高校、大学、次にアジアといった具合に順を追って進んでいく形でしたが、僕の知っているサッカー選手で言ったらイタリアのカナバロさんの映像を見て自分と比較しながら伸ばしていけるわけですからね。選手たちの頼もしさもそうですが、一方で各競技団体がやってきた強化支援策が実を結んできたのかなとも思いますね。

宮本 子どもたちの未来のため、われわれJFAとしても子どもたちにいい影響を与えていける環境づくり、機会づくりというものを大事にしていきたいと思っています。この点において太田さんはどう考えていますか。

太田 子どもたちに伝えていきたいのは、個人的に大きく2つあると思っています。1つは「本物を見せていく体験」。かけこするだけでもプロのアスリートはすごい。僕も現役時代にフェンシングの動きを見せるだけで、子どもたちの目がキラキラになる経験がありました。言葉で伝えるだけじゃなくて、やっぱり視覚で感じてもらうことって重要なな、と。そしてもう1つは「応援の素晴らしさ」。コロナ禍のときに(無観客開催で)応援がなくなって、同じ競技をやっているも全く別のものになったような感覚を、見る側もする側も持ったと思うんです。そして今回、ミラノ・コルティナオリンピックでフィギュアスケートの選手たちに聞いてみたら、すごくやりやすかったと言っていました。応援が上手で、温かくて。たとえ転んでもため息ではなく「頑張れ」という空気があった、と。そうした会場の雰囲気、日本だけでなく他の国も含めてパーソナルベスト、シーズンベストが相次いだ背景にあったと思います。

宮本 上手で、温かい応援があると選手たちのメンタルにもすごくいい影響を与えて、パフォーマンスも上がっていくわけですね。

太田 また、選手たちのメンタルサポートという観点に立てば、アスリートがSNSで発信するのは当たり前。ポジティブではない声も、選手のもとに届いてしまう。われわれもウェルフェアオフィサーを置いて大会期間中に(メンタル面の)サポートをしましたが、日常的にそういったサービスをどう提供していけるか。国立スポーツ科学センターやハイパフォーマンススポーツセンターでも実施していますが、まだ限定的なのでサッカーを含めて競技横断的にやれたらなと思っています。

宮本 一緒にやっけていけるところは、われわれとしても協力してやっていきたいですね。

太田 ぜひお願いします。

宮本 今年はミラノ・コルティナオリンピックに始まり、野球の2026ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)、6月開幕のFIFAワールドカップ2026、そして9月には第20回アジア競技大会(2026/愛知・名古屋)も待っています。国を背負ってプレーするというのを、太田さんはどう捉えていますか。

太田 かつてはプロのアスリートがオリンピックに参加しても、あまり魅力的に映らなかったことがありました。でもそれが明らかに変わってきていて、たとえばテニスのジョコビッチ選手は、金メダルを手にしたことを「これ以上に誇らしく、幸せなことはない」と言っていましたよね。それってやっぱりプライドだと思うんです。代表として競技することは国と自分の接合点であり、国民のプライドになれる。それこそツネさんにうかがいたいですよ。

宮本 日本代表時代、ジーコ監督から『国民を幸せにすることが自分たちの使命なんだよ』と言われたときに、ストンと腹落ちしました。いろいろと(メディアに)叩かれようが、練習でつらくなるが、プレーで痛がるのがやり甲斐しかなかったの。

太田 宮本キャプテンの思いが、今のサッカー日本代表にもつながっている感じがあって素敵です。

宮本 確かに、そういうものがチームとして継承されていくというのは、自分自身も感じています。

太田 ワールドカップが終わったら、ぜひアジア競技大会にも注目していただきたい。オリンピック種目に含まれておらず、アジア競技大会を頂点にしている競技もあります。日本を背負って戦うアジア競技大会をぜひ楽しみにしていただけたらと思います。

宮本 最後になりますが、自分も太田さんも「元選手」だからこそ活かせる場所があると思うんです。アスリートとしてのキャリアを終えた後、運営サイドとかアドミニストレーションのほうに価値を見いだす世界と一緒につくっていったらうれしいですね。

太田 国際オリンピック委員会(IOC)をはじめ各国・地域のNOCでも普通にオリンピックがアドミ側にいます。日本では多分サッカーもそうだと思いますが、われわれのほうもそれはまだまだ。たとえば人材の流動性で言えば、JOCからサッカーに行き、バスケットに行き、ラグビーに行き、いろんな組織に回っていきえるような仕組みができてくると、活性化していくと思うんです。プロフェッショナルのビジネス人材を採るだけじゃなく、スポーツ界からの意見がしっかりとビジネスライクになってしまう可能性もある。やっぱりスポーツ界からも人材が出てくるのが望ましいですね。

宮本 いずれ太田さんがJFAに来てくれるというふうに受け止めておきます(笑)。

太田雄貴(おおた・ゆうき)

1985(昭和60)年11月25日生まれ。滋賀県出身。フェンシング(フルール)日本代表として2008年北京、12年ロンドン、16年リオデジャネイロの各オリンピックに出場。ロンドンオリンピックでは男子フルール個人で銀メダルを獲得し、日本フェンシング界初のオリンピックメダリストとなった。現役引退後は競技団体・国際組織の運営に携わり、17年に日本フェンシング協会会長に就任。国際フェンシング連盟では理事、副会長を歴任。25年より日本オリンピック委員会(JOC)専務理事。

※次号は2026年6月発行予定/本誌クレジット表記のない写真: ©JFA、©JFA/PR、©Jリーグ、©WEリーグ

